第 72 回東北・北海道地区高等教育研究会 概要

日　　時：令和５年９月７日（木）・８日（金）
会　　場：小樽商科大学（北海道小樽市緑３丁目５番 21 号）　対面開催
全体テーマ：「コロナ終息後に高まる新たな高等教育の視座」

≪日 程≫

【１日目】９月７日(木)

〇受付　　９：１５～１０：００
〇総会Ⅰ　　１０：００～１０：２０
・委員長挨拶　小樽商科大学長　穴沢　眞
・議長選出
・前年度庶務・会計報告及び会計監査報告
〇全体会Ⅰ　　１０：２０～１１：３０
・基調講演
演題　：「新しい時代の大学教育（仮題)」
講演者：東京大学　教授　両角　亜希子

― 昼 食 ・ 休 憩 ―

〇分科会　　１３：００～１７：００
・第１分科会　テーマ：「文理を横断する共通教育・専門教育の可能性」
・第２分科会　テーマ：「外国語教育とテクノロジー」
・第３分科会　テーマ：「社会・地域の要請と高等教育改革」

※１日目終了後、情報交換会を行いません。

【２日目】９月８日(金)

〇全体会Ⅱ　　９：３０～１１：４５
・事例報告
題目　：「グローカル教育の成果と課題：実践現場の視点からの考察」
報告者：小樽商科大学グローカル戦略推進センター グローカル教育部門　准教授　小林　広治
・分科会報告・意見交換・質疑応答
〇総会Ⅱ　　１１：４５～１２：１５
・次期当番大学について
・次々期当番大学について
・次期役員について

― 閉 会 後 ―（前回、今回、次回、次々回当番大学のみ）
〇幹事大学会議　１２：１５～１３：１５

〇全体テーマ：「コロナ終息後に高まる新たな高等教育の視座」

2020 年初頭から世界中で猖獗を極めた新型コロナ感染症は、それまでの社会生活に大きな転換をもたらしました。中でも教育現場に対する影響は極めて大きいものでした。ただ、人類が行う最も悲惨な営為といえる戦争が、他方科学の飛躍的な進歩をもたらしてきたように、私たちを苦しめてきたこのコロナ禍が、それまで遅々として進まなかった遠隔教育への理解と技術を一気に前進させた事実は否めません。コロナ禍がようやく終息しようとしている現在、これらの革新的教育手法は各教育機関で市民権を得、終息後も各教育機関ではこれを部分的に残し、従来の対面型教育の補足的・発展的手段として利用していくことでしょう。

このように、コロナ禍は、高等教育の視座を一段高める結果をもたらしましたが、それは大きく分けて３つの分野に革新をもたらしました。

まず一つ目は、言うまでもなく ICT 機器を活用した教育のデジタル化です。今後は、より効果的なデジタル・ツールやオンラインプラットフォームが開発されることにより、バーチャル・リアリティー空間にまで教育の場が広がり、より広範な教育効果が達成されることでしょう。また、従来ではアンケート等に頼るしかなかった教育効果の測定についても、デジタル技術を活用することで、より明確な教育効果の可視化が可能になると思われます。

二つ目は、教育対象の飛躍的な拡大です。遠隔教育・オンデマンド教育は、空間・時間的制約から解放され、いつでも・どこでも教育を受ける機会を広げます。この技術は、グローバル教育やリカレント教育にも劇的なイノベーションをもたらし、教育に地域や、国境や、社会階層の垣根を飛び越えさせる効果をもたらすことでしょう。

そして三つ目は、教育の省力化・効率化です。従来のプリントに頼ったオーソドックスな教育手法の少なからぬ部分が、デジタル化によりペーパーレスに代替可能となり、学生にとってもスマートフォンやタブレットが、今までのノートや辞書に代わる受講ツールとなりつつあります。日頃のルーティンワークがデジタル化されることにより、教員や学生の負担が軽減され、同時にこうした技術は記録性も優れていますので、後からの振り返りにも有効です。

しかしまた、長らく十分な対面授業を行えなかった高等教育現場では、対面授業が復活した今、その新たな見直しも始まっています。今回の研究会では、そうした高等教育現場での様々な試みの実例を紹介して頂く予定です。

今回は、研究会の全体テーマを「コロナ終息後に高まる新たな高等教育の視座」とし、以下の３つの各分科会を設けました。

分科会１：「文理を横断する共通教育・専門教育の可能性」
分科会２：「外国語教育とテクノロジー」
分科会３：「社会・地域の要請と高等教育改革」

全体会や分科会における皆様との有意義な意見交換を通して、本研究会が実り多いものとなることを期待しております。

第１分科会テーマ：「文理を横断する共通教育・専門教育の可能性」

グローバル化やDX、Society 5.0の進展に伴い、これまで初等中等教育および高等教育を貫いてきた「文系理系」という枠組みは再考を迫られています。2022年9月の中央教育審議会大学分科会大学振興部会での指摘にあるように、自然科学、人文・社会科学の枠を超えて知識や情報を組み合わせ、新たな価値を創出する人材の育成、いわゆる文理横断・文理融合教育の観点が重要性を増しているのです（「文理横断・文理融合教育の推進について（審議経過メモ）」）。2015年に国連で採択されて以来、学校段階を問わず教育活動に取り入れているSDGs（持続可能な発展目標）でも、自然環境への配慮に加え、教育・福祉の一層の普及、社会的公正への取り組みなど、分野横断的な目標が掲げられています。さらに、自然科学・技術（Science, Technology, Engineering and Mathematics: STEM）と人文科学（Arts）をつなぐSTEAM教育の推進が国内外で提唱されるなど、文理横断・文理融合は今後の高等教育における重要課題の１つになっていると言えるでしょう。

一方で、人文・社会・自然の諸科学にわたって幅広い識見を育成する「教養教育重視」の考え方、「リベラルアーツ教育」の視点は、すでに1990年代から議論が重ねられ、実践が蓄積されてきた事項でもあります。また、とくに地方大学においては、地域連携や産学連携の取り組みを通して文理横断・文理融合教育が進められてきたことも考えられるでしょう。この分科会では、文理の枠を超えた分野横断的な取り組みの現状と課題についてご紹介いただきながら、文理横断・文理融合教育の可能性について議論を深めていきたいと考えます。

＜キーワード＞

文理横断・文理融合、リベラルアーツ、共通教育・専門教育、教養教育、SDGs、
STEAM教育、地域連携・産学連携